

宮川淳の批評実践にみる理論的可能性——「影論争」「手仕事論争」を中心に

横尾 千穂 (東京大学)

美術批評家・宮川淳(1933-1977)は、1960～70年代、当時の社会構造の変調を敏感に感じ取り、現代美術を中心に、現代詩や小説、構造主義や情報理論などのアカデミックな潮流に見られる「今日的な状況」の正体を、それらに通底する「同時代性」「コミュニケーション概念の崩壊」「存在の思想そのものの解体作業」(宮川淳「ジャック・デリダと鏡の暴力 近代性—その存在の論理の否定」『SD』(1969年6月号)より引用)として明晰に捉えた。加えて、ある構造変化に直面した社会に必要な「問い直しの論理」を、その短い人生の批評実践のなかで探り続けた。

一方、同時代の日本の美術領域を言説・実践の両面でリードするのは、戦後美術批評の御三家と呼ばれる針生一郎(1925-2010)・東野芳明(1930-2005)・中原佑介(1931-2011)らの批評実践だった。しかし宮川は、彼らとは対照的に、フランス現代思想を背景に、対象の根源的な理解を求める姿勢から、難解で、社会や政治には無関心、実証性に乏しい批評家として記憶されてきた。加えて、1960年代後半以降、美術批評からは一線を引き、言語そのものへの興味や、独自の引用論へと展開していく。そのため、日本の美術界に残した印象的な足跡が度々指摘されながら、現代美術の現場には決定的な影響を及ぼしたとは言えない点において、御三家周縁の美術批評家の一人とされてきた。

本発表では、「影論争(1965～1966)」、「手仕事論争(1967～1969)」(伊村靖子(2013)『1960年代の美術批評：東野芳明の言説を中心に』(京都市立芸術大学審査学位論文(博士))参考)を中心に、1960年代後半、宮川が同時代の美術批評との関わりのなかで、自身の論理を形成していく様子を辿り直す。当時の日本の美術界は、反芸術の動向を加速させた読売アンデパンダン展の終了にはじまり、赤瀬川原平の千円札裁判に集約される前衛批判、大阪万博に頂点をみる環境芸術といった変化のなかにあった。大衆社会、複製技術、大量生産など、この時期に問題化される現代社会の様相は、芸術を論じる際の根拠や文脈として使い分けられ、多くの見解を生んでいく。またここで、芸術に広く求められた「創造性」は、両論争に共通する背景であり課題でもあった。

こうした状況に応じ、宮川は次第に「見ること」という課題を明確にし、その後、引用論へと向かっていく。しかし、当初からその道筋を見据えていたのではない。宮川の評言は、1960年代後半の議論の過程で、美術批評というカテゴリーに回収されない理論的可能性(岡崎乾二郎(2007)「批評を召喚する—かつて存在した美術批評の回顧にかえて」美術評論家連盟/編『美術批評と戦後日本美術』参照)を確かにしていく。そこで宮川が記述

したものとは、「絵画の制度」や「作家の世界に対するかかわり方」といった、作品の様式的な認識とは別の水準で理解される同時代の美術動向であり、芸術制作における「創造性」の現代的なあり様であった。